

どうして芳子さんは、戦争体験を語るのを「恥ずかしい」と思っているのか！？

事前

- ・佐敷の人は、佐敷で亡くなっている人が多い。
- ・名護で亡くなっている人が多い。

戦争のイメージ

- ・人が死ぬ
- ・食べ物がない
- ・自由がない

ちねん よしこ
知念 芳子(大正 14 年生まれ)

〈村内避難〉

壕から眺めていた日本軍の特攻攻撃

壕のあるところは、ちょうど新里(集落)の後背地になっていた。そのため、壕からは海がよく見えていた。勝連半島(現 うるま市の東南部に位置する半島)近くの海にアメリカ軍の軍艦が、いっぱい停留しているのが見えた。

日本軍の特攻隊が飛んできて、アメリカ軍の軍艦めがけて特攻攻撃をしていた。しかし、(特攻隊の飛行機は)突撃する前にほとんど落とされていた。一機だけ突撃に成功していたのを見たことがある。私たちは毎日、そのような状況を見ていた。

水も食糧も豊富な壕生活

旧稲福にいた日本軍が島尻(沖縄本島南部)に移動以降、私たちは 1 人の日本兵にも会わなくなった。戦争が激しくなっていた時期だったが、私は夕方になると腰に木の枝を差して芋掘りに行っていた。また、殿には米が山盛りに残してあった。以前そこに米を担いで運んで行ったことがあるから、そのことを知っていた。私は、殿から(避難している壕まで)米を担いで運んだ。私たちが捕虜になったあとは、ほかの住民が殿の米を取り合うようになった。

旧稲福区にある慰霊塔の西側にあるカゾーラーヤマ壕(場所不明)にも、タオルや^{かつおぶし}鰹節などの日本軍の物資が相当あった。私はその壕にも物資を取りに行った。

ある日、カゾーラーヤマ壕から現在の稲福の北はずれにあるイランダ(玉城盛明さんの家のあたり)で、アメリカ軍がテントを張っているのを見て、大変だと思って逃げ帰ったことがあった。

旧稲福区のザンクビリ付近に、^{イータマグスク}〈上玉城〉の畑があり、その畑の下にガマがあった。そのガマには米や乾燥ジャガイモ、ワカメなどの食糧品や、毛布などがいっぱいあった。私たちはそのガマからも米を取っていた。私はそのとき、カリガマーというところで一軒だけ明かりが付いているのを見た。稲福の人たちが、ほとんど島尻に避難している時期だった。

日本兵がいたところでは、早く島尻に避難するように言われていたようだ。また、^{ひゃくな きらばる}百名や喜良原(どちらも現 南城市)あたりの人たちも島尻に避難していたようだ。私の親戚も喜良原に避難していたようだ。

新里には日本兵がいなかったので、私たちはそのまま壕にいた。捕虜になってから色々なことはあったと思うが、戦争中の新里の犠牲者は4,5人と少なかったと思う。

弾は私たちの頭の上をヒューヒューと飛んでいたが、私たちのところには落ちなかった。新里を超えて日本軍のいる島尻に飛んでいた。

私たちが避難していた壕の近くには水が湧くところがあった。その水でご飯を炊いたり、風呂に使ったりしていた。そのため何の不自由もなかった。夜はシンメーナービ(大鍋)で米を炊き、ヤギや豚を^{つぶ}潰して夕飯を食べ、壕の中で寝た。翌朝はアメリカ兵が壕に来たら大変だということで、朝食をすましたあと、昼ご飯用に肉を詰めたおにぎりを作って山に隠れていた。

私は山の中に隠れているとき、捕虜になった住民を載せたトラックが、新里ビラ(坂)を通っていくのを見たことがある。

当時は芋を主食とする時代だったが、(戦争中は)戦争前よりご馳走を食べられた。(そういった面では)喜びながら過ごしていた。しかし、シラミが大変だった。シラミはいくら潰してもずっと湧き出てきて、とても気持ち悪かった。あの体験はよく覚えている。今でも、(避難していた)あたりを通ると「おかげでご馳走になりました」と、礼をして通る。

情報が少なかったのが幸이었다

避難中、誰からも連絡はなかった。以前に山のカズラ(芋の葉)を摘むために歩いていると、刀を差した日本軍の将校らしき人たちとばったり会って、びっくりしたことがある。その日本兵たちは

「心配するな。向こう(東側の海)にはアメリカ軍の軍艦がいっぱいいるから、危ないときにはとみぐすく豊見城の軍の壕を探して行きなさい」と言っていた。(この日本兵たちは)きっと偵察のために歩いていたのだと思う。しかし、私は豊見城の壕に行く気はなかった。なぜなら、食べ物があるから逃げる必要はないと思っていたからだ。どこにも行かなかったのは(今思うと)不思議なことだ。

おばさんに促されて山を下りる

私たちが壕から墓に移動していた時期にはすでに、新里の人たちは、ほとんど捕虜になっていたようだ。

私たちが捕虜になったのは、おばさんが呼びに来たからだ。おばさんが墓に置いていた自分の着物を取りに来たとき、「ヨシコー」と私を大きな声で呼んだ。その声を聞いた私は、「大声を出したら(アメリカ軍に見つかって)大変なことになるのに」と怒った。するとおばさんは「ここにいたのか。あなた方だけがまだ出てきていない(捕虜になっていない)よ。あなた方は死んでしまったという話も出ている。早く(山から)出てきなさい」と言った。そこで私たちは、おばさんと一緒に山を下りた。

おばさんは「あなた方は生きていたのか」と言ったが、私は「私たちが死ぬもんですか」と笑って答えた。

ヤンバルでの苦しい生活

(しばらくして、)馬天港(現 南城市)から船に乗せられた。どこで降ろされたかわからないが、久志村(現 名護市)という小さい集落に収容された。

当喜でも配給はあったが少ししかなかった。米は1合ぐらいいし、他に食べるものはなかった。配給だけでは足りなかったので、チフアンブー(フキ)の茎をゆがいて皮を剥ぎ、川で晒して灰汁を抜いて食べた。捕虜になってからの生活は苦しかった。

私たちは米を少し持っていたから、まだましなほうだった。戦争中は(苦労もそれほどなく食生活は)上等だったが、捕虜になってからはアワリ(苦労)した。それでも生き延びたからよかった。

戦没者の資料と関連

戦時中も慈悲の心を忘れない母

母は、側にいる親戚の人たちが何も持っていなかったのをかわいそうに思い、米を分け与えて

いた。私が「難儀して担いできて、自分の食べるものも少ないのに、他の人にあげるのか」と言うと、「皆同じ(状況)であるのに、自分たちだけ食べることができるか」と言っていた。私の母はそんな人だった。

本家のおじいさんと孫が、ケガが元で亡くなる

ヤンバルでは食べるものがなかったから、「軍に稼ぎに行く」と言って、山に入ってアメリカ兵相手に商売をする女の人も多かったと聞いている。

当喜には何ヵ月いたかわからないが、そこで私や私の周りの人たちがマラリアに罹^{かか}ることはなかった。ただ、一緒に行動していた佐久間のおじいさんと、その孫のセイケンは、ケガが元で亡くなった。私の母はセイケンを背負って病院に連れて行っていた。

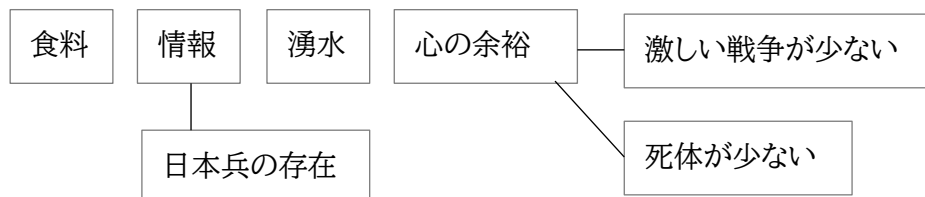
2人は新里で私たちと同じ壕に避難する前に、他のところで怪我をしたそう。なお、そのときに母親(セイケンの母か?)は亡くなったという。その後、私の母親が2人を引き取り、2人は(新里の壕に)一緒に避難するようになったそう。

イクサユー(戦の世)は、みんな頑張った

戦の最中に栄養をつけて今まで元気である。イクサユー(戦の世)はみんな頑張った。私の祖母は八重山に寄留していた息子のところに行き、そこで93歳で亡くなった。私の母は長生きして92歳で亡くなった。妹も93歳まで生きた。

戦争中、島尻あたりに避難した人たちは食べることもできないで、相当苦労したようだ。私たちは一切そのようなことはなかった。どこにも行かず(ひどい戦争被害を受けなかった。ほかの戦争体験者の苦労を考えると、戦争体験を語るのは)恥ずかしい。だから、戦争体験としてはあまり参考にならないと思う。

①芳子さんは、どうして生き延びることができたのか？



②芳子さんの「恥ずかしい」とは、どういう意味だろうか？

※「危険なところ」がどこだろう→